

ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーと 「批判的」ナショナリズム分析(1)

今 野 元

0. 研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」

昨今のナショナリズム研究を概観するとき、我々はそこに3つの問題を見ることが出来る。(1)ナショナリズム研究が事実上、反ナショナリズム「教壇預言」と化しているという問題。従来のナショナリズム研究は、その克服のための政治運動と一体化してきた。近年ではネイションの「虚構」性を暴露し、「過去の克服」の主体としてであれ、その存在を一切許容しないかのような強硬論まで見受けられる。だが凡そ学問において、感情的な白黒図式は、分析を粗雑にし、討論を硬直させるのみで、結局は有害無益となるのが常である。従来のようにナショナリズム研究と反ナショナリズム運動とを同一視するならば、一見「白い」と思われたものは徹底して「白く」、「黒い」と思われたものは「黒く」描くという傾向を助長し、ナショナリズムを巡る歴史の逆説を見逃すことにもなりかねない。(2)ナショナリズム批判が、分析対象によって不公平に展開されているという問題。ヨーロッパに関して言えば、第三帝国の記憶が生々しいドイツ・ナショナリズムが強く否定される傍ら、チェック・ナショナリズムやポーランド・ナショナリズムは「悲劇の民族」の愛国心として共感交じりに描写され、イギリスやフランスのナショナリズムが先進的形態として模範視されるが、ロシア・ナショナリズムは後進的形態として軽蔑されるという具合である。結局これも、特定の国際政治状況を肯定したり否定したりする政治的道具に、現代のナショナリズム研究が陥っているということに他ならない。(3)ナショナリズム研究においても「英語帝国主義」¹⁾が顕著であるという問題。ハンス・コーン、カール・ドイチュ、アーネスト・ゲルナー、ベネディクト・アンダーソン、ライア・グリーンフェルド、エリック・ホブズボーム、アンソニー・スミスといったアングロ＝サクソン圏の、大胆な比較や推論を駆使した図式的ナショナリズム批判が、あたかも学界の通説

であるかのように紹介されるのに対し、それ以外の語圏の研究はそもそも存在しないかのように扱われるか、マイネッケの「文化国民」、「国家国民」論のごく卑俗化した形態で流布されるのみである。特に膨大な蓄積のあるドイツのナショナリズム研究を看過することは、固より学問上許容できることではないが、ドイツ語を使用できるナショナリズム研究者が減少する中で、事態は悪化する一方である。

研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」は、かかる研究動向に一石を投じるべく構想されたものである。本研究企画では、第一にドイツの主要なナショナリズム研究者を選出し、その学説の概要を紹介した上で、それにどのような学問的意義があるかを検討する。研究者の選出に当たっては、個別の実証研究の経験を踏まえ、更に思考を深めて理論的見通しを示した人物に注目する。第二に、その人物がナショナリズム研究を生み出すに到った人生上、あるいは研究上の経緯について叙述する。これはかつて叢書『ドイツの歴史家たち』²⁾が行ったことを、ナショナリズム研究に焦点を移し、その執筆者世代も分析対象に入れて再び実施するものである。このような作業を経ることによって、この研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」は、先進的研究の「学習」という単なる「輸入学問」の試みとは一線を画し、一種のドイツ学問史ないし政治史の試みともなるのである。

1. ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーの人格と業績

本論はこの研究企画の第二作として³⁾、ビーレフェルト大学名誉教授ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー（1931年-）を取り上げる。ヴェーラーは現代ドイツを代表する歴史家の一人であり、「ドイツ特有の道」論を提唱する「ドイツ社会史」派の総帥であって、従来ナショナリズムの厳格な批判者として知られてきた。本論では、まずヴェーラーという人物について概説し、次いで彼のナショナリズム研究を概観し、その上で彼のナショナリズム研究の意義を診断する。多作で注目度も高いヴェーラーは、それだけ取り上げるべき事実も多いので、本巻では人物解説だけを行い、彼のナショナリズム研究の検討は次巻に回すことになる⁴⁾。

ヴェーラーは1931年9月11日、ジーゲン近郊の町フロイデンベルクで生まれ、ケルン近郊の町グンメルスバッハで生育した。ヴェーラーは、実

家が元来はオランダからナッサウに來たユグノー系商人であったことを意識している(ヴェーラーがそれを強調するのは、尊敬するマックス・ヴェーバーに自分を重ねているからなのかもしれない)。もっともヴェーラーの両親は、厳格なカルヴィニズムには反撥してヴァンダーフォーゲル運動に参加し、息子を自由に育てたという。とすれば、ヴェーラー家はプロテスタンティズム主導の近代ドイツ国民国家において、ドイツ・ナショナリズムに相当深入りしていたのではなかろうか、国民社会主義にも無縁ではなかったのではなかろうかと、誰しも思うことだろう。しかしヴェーラーは、こうした疑念を全て門前払いする。ヴェーラーは、「家族全員」、とりわけ母エリザベート(旧姓ジーベル)が国民社会主義ドイツ労働者党を「茶色の異教徒」と軽蔑していたこと、下士官として出征、戦死した父(商人)テオドルが西部戦線で英語、フランス語通訳を務めていたこと、ヒトラー・ユーゲント予備軍「ユングfolk」の一員だった自分が、スポーツやキャンプ活動などに熱中し、イデオロギーには無縁だったことを強調し、1945年以前の自分がドイツ史の「負の側面」と一切関係ないことを断固力説する。「過去」の糾弾者ヴェーラーの自己申告によれば、彼自身の「過去」には自己批判は一切無用ということになるらしい。のちにヴェーラーの姉妹が、当時の煽動用語で書かれた少年ヴェーラーの日記を発見したといわれ、また彼も当時アメリカ軍の侵攻からケルンを防衛する戦闘に参加したというのだが、それは彼にとって心の痛むことではないようである⁵⁾。

ヴェーラーの人生を決定したのは、戦後のアメリカ合衆国との出会いであった。従来「ライヒ」の防衛を念じてきた「ユングfolk」隊員ヴェーラーは、進駐してチョコレートや菓子をドイツ人に振舞うアメリカ軍兵士を眼にして、一転彼らに親近感を懐くようになっていった。第三帝国支持派の教師たちが追放されたギムナジウムで、復職した元ドイツ民主党員の老教師から薫陶を受けたヴェーラーは、1952年にケルン大学に入学したが、すぐに西ドイツ最初のフルブライト奨学生の一員として渡米し、一年半の留學生活を送った。ハーヴァードやプリンストンに憧れていたヴェーラーは、結局オハイオ州アセンズの、学生数4千人ほどの田舎大学(オハイオ大学)に回されてしまったが、それでも彼のアメリカ留學は実り多きものとなった。そこでヴェーラーが学んだのは、日常史・技術史・社会史といった新しい歴史叙述であり、また生きたアメリカ・デモクラシーの日常であったという。またヴェーラーは、のちに西ドイツ社会史の祖となる

アメリカ滞在中のハンス・ローゼンベルク(1891-1976年)にも出会っている。1年間の大学生生活ののち、更に半年間肉体労働者やトラック運転手として労働にも従事したヴェーラーは、有色人種の同僚とも接触して、アメリカ社会の底辺を見聞した。ちなみにヴェーラーは、同じアングロ＝サクソン圏でも、イギリスには比較的馴染みが薄い。この点ではイギリスからの奨学金で留学し、のちにロンドンのドイツ現代史研究所長となったヴォルフガング・J・モムゼン(1930年-)とは異なっている⁶⁾。

アメリカ帰りのヴェーラーは、アメリカを中心とする自由主義陣営の傘下に建国された新しい西ドイツ国家、ドイツ連邦共和国に一体感を感じるようになっていく⁷⁾。(アメリカを含めた)西欧的(westlich)なるものに心酔し、ドイツの西欧化もまた必然であるという「ドイツ特有の道」の観念世界は、ヴェーラーの戦後体験に裏打ちされたものであったように思われる。こうした西欧への憧憬、西ドイツへの自己同一化は、ヴェーラーにとっては非西欧的なるものの嫌悪と、表裏一体のものであった。西独人ヴェーラーは、アメリカ軍の良心的な西独占領と、ソヴィエト軍の暴虐な東独占領とを好んで対置する⁸⁾。西欧に対するドイツの後進性を批判しつつも、後進的なロシアと比較したドイツの先進性を強調し、また後述のように、トルコのEU加盟を峻拒する歴史家ヴェーラーの感情的な姿勢は、彼の西欧礼讃と切り離しては理解できないものである。

ヴェーラーは帰国後に学籍登録したボン大学で、ドイツ歴史学界に苛立ちを強めていった。ヴェーラーが名指しで批判するのは、近代史家マックス・ブラウバッハ(1899-1975年)、中世史・初期近代史家フランツ・シュタインバッハ(1895-1964年)である。ブラウバッハは5巻にも及ぶオイゲン公の浩瀚な伝記で知られる歴史家で、のちに社会構造史を提唱するヴェーラーが批判した、大人物中心の「政治史」研究者の典型であった。これに対してシュタインバッハは、ライン地方の社会史、経済史、農業史を専攻する歴史家で、ヴェーラーも学者としては一定の評価をしているが、講義のやる気なさには苦言を呈している。ボン大学で「パニック」状態になったヴェーラーは、グンメルスバッハの同郷人で、のちに「社会哲学」で有名になるユルゲン・ハーバーマス(1929年-)などが在学していたボンを捨てて、古巣のケルン大学へと遁走した。ヴェーラーはボン大学歴史学科の一角にあった、アメリカ史家(マイネッケ門下)ディートリヒ・ゲルハルトが率いる通称「アメリカ研究所」を「ホームベース」として、新

たな大学生生活を開始したのである⁹⁾。

このケルン大学でヴェーラーを魅了したのが、彼の指導教官となるテオドル・シーダー(1908-1984年)であった。シーダーは第三帝国期にはケーニヒスベルク大学教授を務め、ナショナリズムの論客として活躍し、国民社会主義ドイツ労働者党にも加入していたが、戦後はケルン大学教授の職に納まっていた。シーダーはドイツ歴史学の権威『史学雑誌』の編集人を務め、ケルン大学学長、バイエルン学術アカデミー総裁など数々の顕職を歴任し、その門下からはロタール・ガル(1836年-)からW・モムゼンまで、様々な傾向の歴史家たちが巣立っている。ヴェーラーはこのシーダーに、単なる教師以上の強い敬愛の念を懐き、ローゼンベルクとシーダーに戦死した父の姿を見出したとまで述べている。シーダーは読み上げ式ではない、透徹した講義でヴェーラーを感激させ、彼が参加した演習では、若き日のマルクスや、ヘーゲルとマルクスとの間に位置する知識人としてのクラウゼヴィッツなどを取り上げていた。ただシーダー以外の教師は、ハンス・デルブリュックの女婿ペーター・ラッソウ(1889-1961年)には興味を惹かれたものの、ケルン大学の歴史学もとりたててヴェーラーを感心させるものではなかった¹⁰⁾。

このころヴェーラーは歴史学と同時に社会学を学び、アメリカ帰りの社会学者ルネ・ケーニヒ(1906-1992年)に教えを受けていた。ヴェーラーはケーニヒに、当時テオドル・アドルノ(1903-1969年)ら「フランクフルト学派」の対抗馬であったアルノルト・ゲーレン(1904-1976年)ら「茶色の」古参社会学者たちと戦う、ドイツの西欧化の英雄を見た。ヴェーラーはドイツの西欧化という政治的・学問的課題の理論的見通しを、ケーニヒが傾倒していたマックス・ヴェーバーから得ようとするようになっていく。ケーニヒはヨハンネス・ヴィンケルマン(1900-1985年)と共に、ヴェーバー生誕100周年を記念して同時代人の回顧録を編集し¹¹⁾、1969年には在独中の安藤英治(1922-1998年)が、独自の史料蒐集を試みる際に援助したという人物であるから¹²⁾、ヴェーラーが彼からヴェーバー崇拜を受け継いだというのは、研究史的に興味深いことである(もっとも、ヴェーラーが試験に際してケーニヒのもとで書いたのは、若き日のマルクスについてであったというけれども)¹³⁾。

ドイツ帝国期の社会学者にして親英米派知識人であったマックス・ヴェーバー(1864-1920年)は、ヴェーラーにとって生涯の学問的先達と

なった。後述するヴェーラーの1970年代以降のドイツ史概説は、どれもヴェーバーの同時代観察・社会学的考察に圧倒的に依拠した作品であり、ヴェーバーの引用は文字通り枚挙に暇がない。ヴェーラーにとってヴェーバーは、社会主義陣営のマルクスに対抗する「ブルジョワ」陣営の守護聖人というより、寧ろマルクスと共に近代ドイツの「後進性」を批判的に析出してくれる彼の理論的導き手であった。このような、マルクス及びヴェーバーの進歩的姿勢に学ぶという研究姿勢は、日本の「戦後民主主義知識人」たちにもよく見られたものであり¹⁴⁾、このことはヴェーバー礼讃のメッカである日本で、ヴェーラーもまた「ドイツ現代史」研究者たちに熱狂的に迎えられた一因ではないかと思われる。

ただヴェーラーのヴェーバー解釈で興味深いのは、同世代の歴史家W・モムゼンの有名なヴェーバー研究に正面から向き合っていないということである。周知のようにモムゼンは、ヴェーラーと同じく近代ドイツの西欧に対する「後進性」を批判する「ドイツ特有の道」論の論客であるが、モムゼンはその矛先をヴェーバーにも向けた。モムゼンはドイツ官憲国家の批判者としてのヴェーバーには大いに共感しつつも、ヴェーバーがナショナリズムに傾斜し、権威主義な指導者民主主義を構想し、平和主義を嘲笑したことを問題視し、彼に第三帝国体制の露払いとしての一面を見ようとして、論議を呼んだのである。「過去の克服」の熱心な唱道者であり、ドイツ帝国期教養市民層の残滓たる「歴史家ツンフト」の批判者ヴェーラーとしては、本来モムゼン以上にヴェーバーを批判しなければいけない立場にあるはずだが、ヴェーラーの描くヴェーバー像は、モムゼンの描くそれのような両義的なものではなく、寧ろ「歴史家ツンフト」世代のヴェーバー礼讃者たちの描くそれに近い。ヴェーラーはモムゼンの『マックス・ヴェーバーとドイツ政治』(1959年)¹⁵⁾を「傑出した作品」と評価はするが¹⁶⁾、ヴェーラーの普段の厳しい近代ドイツ批判は、明らかに彼の守護聖人「聖マックス」を迂回しているのである。

歴史学研究の傍ら、ヴェーラーが精を出したのは政治活動であった。すでにギムナジウム時代、新聞社でのアルバイトに精を出していたヴェーラーは、「半分左派のジャーナリストたち」との交流を重ねていた。アメリカ留学ののち、ヴェーラーは連邦宰相コンラート・アデナウアー(1876-1967年)を直接見たいという希望を懐いて、ボン大学に登録した。連邦議会議員をしていた親戚の助手として会議に出席していたヴェーラーは、

長い討論で自分の意見を着実に通していくアデナウアーの迫力に感服したという。ケルン大学時代には、ヴェーラーは東ベルリンで入手してきた『マルクス・エンゲルス著作集』を、後輩たちに与えて物議を醸した。当時早々とオーデル・ナイセ国境を承認していたヴェーラーは、ノルトライン＝ヴェストファーレン州内務次官であったマックス・アデナウアー（連邦宰相の長男）から危険視されていたという¹⁷⁾。このように徹底した西欧志向から出発し、CDUから徐々に左傾化していくという道行は、前回に取り上げたハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー（1938年-）の場合とも符合していて興味深い。

1956年、ヴェーラーはシーダーの助手に採用され、1960年に博士号を取得した。実はそれまでは、学問の傍ら陸上競技の選手（400メートル走・800メートル走）の選手としても大活躍していたヴェーラーだったが、この当りから「職業としての学問」が彼の視野に入っていたのである。1958年にヴェーラーが博士論文の題目を検討し始めた際、シーダーはクラウゼヴィッツからエンゲルス、レーニンやドイツ陸軍への影響を論じてみてはどうかと提案したが、ヴェーラーはこの提案には乗らなかった。その代わりに浮上したのが、ドイツ帝国の少数民族問題である。同じころ、チュービンゲン大学のハンス・ロートフェルス門下ではハンス・モムゼン（1930年-）が、ハプスブルク帝国の多民族問題を扱った浩瀚な博士論文を執筆していた¹⁸⁾。これを見たシーダーは、ヴェーラーにドイツ帝国の少数民族問題を扱うよう提案し、とりわけポーランド語を勉強してポーランド問題に認識を深めるよう勧めた。この提案を受け容れたヴェーラーは、ポーランド語を学習した上、当時ヴワディスワフ・ゴムウカ（1905-1982年）の自由化路線が進められていた最中のポーランド人民共和国で、ポーランド社会党（PPS）の動向などを調べに文書館を訪問し、ポーランド側から先駆的研究者として歓迎を受けた。こうして完成した博士論文『社会民主党と国民国家』は、多角的な史料分析に基づいてドイツ社会民主党とドイツ帝国の様々な少数民族問題との関係を明らかにし、歴史家ヴェーラーの力量を世に示すものとなった¹⁹⁾。と同時に、ドイツ「東方学」の中心地ヘルダー研究所（マールブルク）から出版されたこの作品は、戦後西ドイツの「東方学」が、ヘルマン・オバン（1885-1969年）やヴァルター・フーバッチュ（1915-1984年）らのナショナリズム路線から、ヴェーラーやイマヌエル・ガイス（1931年-）らの反ナショナリズム路線へと転換しつつある

ことを物語るものでもあった。

順調に博士論文を書き上げたヴェーラーであったが、次の段階である教授資格の取得に当っては思わぬ困難に見舞われた。1961年に教授資格論文の準備にかかったヴェーラーは、1900年以前のアメリカ帝国主義の研究をするべく妻を伴って再び渡米した。だが帰国後、1964年に論文『アメリカ帝国主義の勃興 1865-1900年』²⁰⁾が完成してみると、ヴェーラーとほぼ同年輩ですでに教授職を得ていたアメリカ史家エーリヒ・アンガーマン(1927-1992年)を始めとするケルン大学の教官たちは、(恩師シーダーを除いて)教授資格論文としての受理に否定的であった。1年半の在米研究で膨大な一次史料を処理したことに並々ならぬ自負を懐いていたヴェーラーは、この決定に落胆したに違いない。愛弟子の危機を憂えたシーダーは、ヴェーラーの助手としての任期を2年間延長し、その間にビスマルク研究で実績を挙げるよう勧めた。こうして執筆された第二の教授資格論文『ビスマルクと帝国主義』は、彼の言う「社会帝国主義」、つまり国内の不満を国外への攻撃的政策で拡散させようとする国家の陰謀を描いたもので、左派言論界の官憲国家批判の定石を、他ならぬビスマルクに適用しようとした意欲作である²¹⁾。今度もヴェーラーは、ドイツ民主共和国への滞在許可を得て東独の中央国家文書館(メルゼブルク・ポツダム)を訪問し、またフリードリヒスルーのビスマルク侯爵家の厩の屋根裏で、紛失したとされていたビスマルク関係文書を発見したりするなど、数々の大冒険を経て1966年9月から翌年5月にかけて論文を完成させた。けれども審査委員会は、投票の末この論文の受理も否決したのだった。けれどもシーダーが、エッカルト・ケール再評価などヴェーラーの別な業績の存在を強調した結果、審査委員会はヴェーラーに口頭報告による教授資格への再挑戦の機会を与えた。このときの課題は、「クラウゼヴィッツ及び絶対戦争から総力戦への発展」であり、そこには明確にシーダーの年来の志向が反映されている。30分の報告のあと討論となり、1時間半経ったところで審査員のあるビザンチン学の教授が、ルーデンドルフは市民社会が崩壊したので総力戦に訴えざるを得なかった、ちなみに総力戦を本当に可能にしたのはユダヤ人アインシュタインと原子爆弾なのだと発言して、受験者のヴェーラーと口論になり、シーダーが強引に討論を打ち切るという一幕もあった。このとき室外では、ヴェーラーの妻やW・モムゼン、ガル、ローゼンベルクら友人たちが、長引く審査に心配しながら待っていた。結局

84人の教授による投票により、ヴェーラーは辛くも教授資格を取得したのだった²²⁾。

教授資格論文を巡って辛酸を舐めたヴェーラーは、「歴史家ツンフト」批判の急先鋒になっていく。ナショナリズムに凝り固まった旧世代の教養市民たちがドイツの大学を支配し、学問の刷新を夢見る若き学徒たちを「歴史主義」の呪縛で抑圧したという類の愚痴を、ヴェーラーやその同志たちは、この40年間延々と繰り返してきた。こうしたヴェーラーの「歴史家ツンフト」批判は、ドイツやアングロ＝サクソン圏の言論界で多いに歓迎され、更に日本でもドイツ研究者の間で定説として扱われている²³⁾。けれどもそうしたヴェーラーらの主張をそのまま鵜呑みにするというのは、余りに横着すぎる史学史認識である。確かにヴェーラーが尋常ならざる熱心さで史料蒐集に当り、とにもかくにも力作を書き上げたということに対し、これを否定的にのみあしらい、二度も教授資格を拒否したのは、資格審査としてやはり苛烈に過ぎたのかもしれない。またここまでの努力をしながら苦境に立たされたヴェーラーの悔しさというのも、人間としては共感できる面があるだろう。けれどもヴェーラーのみの主張に従って事情を振り返っただけでも、実情が彼の主張より複雑であったことが見えてくる。実はヴェーラーの研究に対し、攻撃的な態度をとったのはドイツ史家ではなく、アメリカ史家、ビザンチン史家のような外国史研究者であった。またアメリカ史家アンガーマンなどは、旧世代ではなくヴェーラーと同世代の先輩であった。更に、ヴェーラーが辛くも教授資格を取得できたのは、恩師のドイツ史家シーダーの愛弟子ヴェーラーへの強引な肩入れの賜物であり、その意味でヴェーラーは実は「歴史家ツンフト」の温情に救われた、学界クライエンテリズムの受益者だったとも言えるのである。ちなみにヴェーラーの博士論文は、前述のように「東方学」の中心地ヘルダー研究所から刊行されているが、こういった刊行の手筈もクライエンテリズムの「人脈」なくしては整わなかったことだろう。またアングロ＝サクソン圏では、近代化論に基づくドイツの後進性の弾効が日常的に展開されていたのだから、ヴェーラーが批判するドイツ「歴史家ツンフト」のナショナリズムとは、単なる内向きの旧弊墨守ではなく、まさにヴェーバーがミュンヘン講演「職業としての学問」で示唆したような²⁴⁾、アングロ＝サクソン圏の後知恵的で一方的な糾弾に対する、ドイツ側からの異議申立でもあったはずである（丁度1990年代、政治学者ダニエル・ゴールドハーゲ

ン(1959年-)のドイツ人=殺人者民族論に、ハンス・モムゼンらドイツ人専門家が反撥したのと同じように)。またヴェーラーの文章にお馴染みの、価値観先行的な、陰謀説的な歴史解釈が、当時の審査委員会に問題視されたのだとすれば、それは学問的に見て一概に不当とは言い切れまい。

教授資格を取得したヴェーラーが大学教師として落ち着いた先は、ビーレフェルト大学であった。1968年に教授資格を取得後、まずケルン大学で私講師に就任したヴェーラーは、1970年にベルリン自由大学のアメリカ史担当教授となり、1971年にはビーレフェルト大学で「一般史(とりわけ19世紀・20世紀史)」(つまりドイツ近現代史)の正教授となった。ビーレフェルト大学は1969年建学の、ノルトライン=ヴェストファーレン州の新設大学である。それはW・モムゼンの就職先デュッセルドルフ大学(1965年建学・ノルトライン=ヴェストファーレン州)、I・ガイスの就職先ブレーメン大学(1971年建学・ブレーメン市(州))と同じく、1960年代に多く新設された西独大学の一つであり、ヴィンクラーの就職先フライブルク大学とは違い、いわゆる伝統的「名門」ではない。けれどもその分、新しい研究・教育活動の余地が比較的大きい大学だったとも言えよう(ヴェーラーによると、1954年までケルン市に運営されていたケルン大学では、市政を掌握するCDUやケルン大司教庁が、「批判的プロテスタント教徒」の排除に成功していたのだという)²⁵⁾。またドイツでは、フランスや日本とは違い、大学間の階層秩序が明確ではないので、古い伝統校が絶対的権威を有しているわけではないのである。今日ビーレフェルト大学は、ハイデルベルク大学、フライブルク大学、ミュンヘン大学、ベルリン大学、ベルリン自由大学といった伝統校と比肩し得る有力大学となっており、そうなったのには、哲学者ニクラス・ルーマン(1927-1998年)、文学者カール・ハインツ・ボーラー(1932年-)、歴史家ラインハルト・コゼレック(1923-2006年)、ユルゲン・コッカ(1941年-)、ウーテ・フレーフェルト(1954年-)、そしてヴェーラーのような名物教師たちの役割が大きかっただろうと推測される。またビーレフェルトが、偶然にもヴェーラーの傾倒するヴェーバーの父祖の地であり、その妻マリアンネの出身地エールリングハウゼンにも近かったというのも奇遇である。

ビーレフェルト大学に落ち着いたヴェーラーは、徐々に「ドイツ社会史派」と呼ばれる流派を形成し、1970年代に若手の指導的歴史家として頭角を現していった。20世紀の歴史学の流行語である「社会史」は、実際

には地域によってかなり多様な展開を見せているが、そこにはやはり一つの共通項がある。それは、国家（統治機構）の権力闘争に重心を置いてそこで活躍した有名な政治家や思想家の言動を（しばしば礼讃しつつ）叙述するという意味での「政治史」に対抗し、社会（民衆・被治者）の動向に集中するという共通項がある。西ドイツでは、ヴェルナー・コンツェ（1910-1986年）やオットー・ブルンナー（1898-1982年）ら第三帝国期の「民族＝民衆史」（Volksgeschichte）の系譜を継ぐ歴史家たちがこれを始めていたが、ヴェーラーらの「ドイツ社会史派」はこれとは趣の異なる流儀を作り上げた。それは(1)分析対象を限定して一次史料に沈殿するような個別の事例研究に邁進するより、左派的価値観念を前提とした幅広い歴史の概説を目指す学派であり、(2)マルクス、ヴェーバーらドイツ左派言論人の同時代診断から出発し、アメリカ「社会科学」の「理論」枠組に準拠して歴史を「構造」的に説明しようという「歴史的社会科学」（Historische Sozialwissenschaft）派であり、(3)（ドイツを含まない）西欧に対するドイツの政治的後進性が第三帝国の暴虐を招いたという「ドイツ特有の道」論を確信し、伝統的なドイツ「歴史家ツンフト」を打倒して歴史学界に「過去の克服」の大波を起こそうという政治運動である。社会民主党の政権参加（1966-1982年）や学生叛乱（1968年）といった一連の左派興隆の社会風潮とも共鳴して、ヴェーラーら「ドイツ社会史派」は言論界で政治的影響力を持つようになった。「政治史」を因循姑息として積極的排除の対象とし、「歴史家ツンフト」を道徳心なき反西欧的ナショナル・エゴイストと決め付けて弾劾し、「白黒図式」で歴史を裁断することを推奨するという若き歴史学徒ヴェーラーは、ドイツのみならず世界で、とりわけ日本のドイツ研究界で少なからず支持を集めたのである。

いまやドイツ史概説に心血を注ぐようになったヴェーラーは、「社会構造史」（Sozialstrukturgeschichte）という独自の概説叙述の手法を編み出した。ヴェーラーは論文集『帝国の危機の根源』（1970年）²⁶⁾を経て、まずビーレフェルト大学での講義をまとめた『ドイツ帝国』（1973年）²⁷⁾で知名度を高めた。この『ドイツ帝国』を踏み台として、更にヴェーラーは1987年よりドイツ近代史全般を扱う『ドイツ社会史』（Deutsche Gesellschaftsgeschichte）²⁸⁾の刊行を始め、ここで彼の「社会構造史」の手法が確立された。ヴェーラーの言う「社会構造史」とは、「経済」、「社会構造」（社会的不平等）、「政治構造」、「文化」という四つの「枢軸」から構成する「総合」的

歴史叙述の試みのことである。これは一見唯物史観を連想させるが、「下部構造」のような恒常的規定要因はなく、要するに4つの視角から、4つの分野に分けて歴史を考察するという他にない。各「枢軸」の描写は、専ら先行研究に依拠して執筆されているが、ヴェーラーが本質的とみなす現象が強く強調され、著者の政治的価値観を弁証する形になっている。この「社会構造史」は本質的に「内政の優位」を旨とする歴史叙述で、外政は副次的にのみ扱われている。なおこの『ドイツ社会史』は、1995年にドイツ帝国を扱った第三巻が、2003年に第三帝国を扱った第4巻が刊行され、当初の計画ではこれで完結のはずであったが、現在1990年までを扱う第5巻が執筆されている。

ヴェーラーの「社会構造史」は、1980年代になると「イギリス社会史派」と呼ばれるイギリス人若手ドイツ史家たちに批判され、「ドイツ特有の道」論争が勃発することになった。この論争を通じて、ドイツ官憲国家批判という政治的問題関心から「社会構造史」を叙述するというヴェーラーの手法は、「社会史」を自称しても実は（イギリス歴史学の感覚で言えば）「政治史」であると批判されたり、ヴェーラーの視線が、いつの間にかプロイセンに集中していると批判されたり、「市民層の封建化」や「軍国主義」のような近代一般の現象を、ヴェーラーが安易にドイツの特徴であるかのように語られていると非難されたり、ヴェーラーが急進ナショナリズムの勃興を、根拠なく官憲国家の陰謀にしていると批判されたりした。ただ「イギリス社会史派」を、余り英雄視することは適当ではない。確かに彼らには、「ドイツ社会史派」の視野狭窄を指摘したという功績があるが、彼らは「ニューレフト」と呼ばれるマルクス主義知識人であり、悪辣な「歴史家ツンフト」に対する若手進歩派の「正戦」というヴェーラーの紋切型については無批判に踏襲している。また「イギリス社会史派」の内部でも、ジェフ・イリー（1949年-）のようにヴェーラーの「上から」の陰謀説を否定して「下から」の要因を強調するものもいれば、リチャード・J・エヴァンズ（1947年-）のように「ドイツ特有の道」論と変わらない後進国ドイツの批判者もいるなど、かなりの多様性がある。更に、ドイツの歴史家はいずれにしても「国家」のことばかり考えているという物言いには、イギリスの伝統的なドイツ蔑視、言わば「オリエンタリズム」の匂いがする。

1986年、(奇妙なことに)「歴史家論争」(Historikerstreit) と呼ばれる言論人の政治闘争が勃発すると、ヴェーラーも盟友ハーバーマスと共に、「ホ

ロコースト」(ドイツ国民社会主義体制のユダヤ人虐殺)を人類史上比較不可能な犯罪だとする立場から、エルンスト・ノルテ(1923年-)らを、世界史上の多くの虐殺を挙げることで第三帝国の「過去」を相対化した大罪人として弾劾する政治運動に加担した。ヴェーラーは自ら論争の渦中に身を投じることはなかったが、1988年になって論争全体を展望する『過去の除去?』を刊行し、ハーバーマスを支援する行動に出たのである²⁹⁾。この歴史家論争を通じて、ハーバーマスやヴェーラーらが主張する、西欧的で普遍的な「価値」の共同体へのドイツの無条件降伏を称揚する、いわゆる「ポスト・ナショナル」な政治文化の推進運動が、言論界で盛んに活動を始めたのである。けれどもこのとき、これまで「過去の克服」に邁進してきたヴェーラーの同志全てが、彼と行動を共にしたわけではなかった。ボン大学教授カール・ディートリヒ・ブラッハー(1922年-)や、ブレーメン大学のI・ガイスらは、ハーバーマスらの感情的な「比較不可能」性論には学問の危機を感じたのだった³⁰⁾。

それから僅か1年余りのち、ヴェーラーらが唱導してきた「ポスト・ナショナル」な政治文化に、深刻な危機が訪れる。その契機となったのは、1989年の「ベルリンの壁」崩壊と、1990年のドイツ再統一である。「過去の克服」への熱心さを国際社会に広く披露し、東西分断の状態を受け入れていたはずのドイツ人が、「ベルリンの壁」崩壊後僅か1年足らずのうちに再統一に走ったのである。連邦宰相ヘルムート・コールの与党であるCDU/CSU、FDPが再統一に熱心だったのは当然のこと、SPD内では再統一に熱心なヴィリー・ブランツ(1913-1992年)、ヘルムート・シュミット(1918年-)と、「ポスト・ナショナル」派のオスカル・ラフォンテーヌ(1943年-)との間で深刻な対立が持ち上がった。「共に属するものが癒合する」(was zusammengehört, das wächst zusammen)というブランツの有名な決め台詞は、「ポスト・ナショナル」な政治文化なるものが社会民主党内においてすら共通理解ではなく、反ナショナリストの希望的観測に過ぎなかったことを明らかにした。再統一後、ドイツでは「西欧統合」、「西欧の価値共同体」への帰依、「過去の克服」といった低姿勢の対外姿勢を見直し、軍事行動も含めて毅然たる主体性を快復するべきだという「普通の国」論が、アルヌルフ・バーリング(1932年-)、ライナー・ツィーテルマン(1957年-)、カールハインツ・ヴァイスマン(1959年-)、ハンス＝ペーター・シュヴァルツ(1934年-)、K・H・ボーラーといった保守系論客か

ら次々に唱導されるようになった。こうした一連の流れに抗して、ヴェーラーは80年代の「ポスト・ナショナル」な態度を貫いた。ヴェーラーは中道左派言論誌『ツァイト』や中道右派日刊紙『フランクフルター・アルゲマイネ』において、相変わらずネイションの虚構性を強調し、その近代史における負の遺産を繰り返し、現代においてナショナリズムに回帰することの愚を激しい口調で説法したのである³¹⁾。しかし現実政治の潮流は、明らかに「普通の国」路線の方に向かっていているように見える。ウンター・デン・リンデンのヴィンクラーを先頭に、他にもブラントの副官であったエゴン・バール(1922年-)や、有名な外交史家であるニュルンベルク＝ニュルンベルク大学教授グレゴール・シェルゲン(1952年-)が、ヨーロッパに深く根差した新しいドイツ国民国家の主体性を要求し、ドイツの世界政治の舞台への復帰を主張したのである。実際シュレーダー赤緑政権は、1999年にコソヴォに、2001年にアフガニスタンに連邦軍を派遣し、ドイツが戦闘行為も含めた「国際貢献」を担う用意のあることを国際社会に示して、ヴィンクラーらの喝采を浴びた。こうした中で、すでにビーレフェルト大学を退官したヴェーラーの存在は、次第に薄いものとなっていった。

政治評論家として反ナショナリズム煽動に邁進したヴェーラーは、歴史学界でもナショナリズムに傾斜する他の指導的な歴史家たちと対決した。とりわけ華々しいのが、トーマス・ニッパーダイ(1927-1992年)との競合である。ニッパーダイは、近代ドイツの民間諸団体を調査した研究で教授資格を取得し、ミュンヘン大学で歴史学を講じた、ヴェーラーとは違う意味での「社会史」研究者であり、社会民主黨員であった。このニッパーダイは、ヴェーラー『ドイツ帝国』の酷評者であった³²⁾。またニッパーダイの3巻本の概説書『ドイツ史』は、彼の死去により第一次世界戦争終了までで終わったが、現代ドイツにおいて評価が高い概説書の一つであり、同時に彼が熱心なドイツ・ナショナリストであることを示す証左でもある³³⁾。刊行中のヴェーラーの概説書『ドイツ社会史』は、ニッパーダイへの対抗心を剥き出しにし、ナショナルなニッパーダイに対する「ポスト・ナショナル」な対抗軸を打ち出そうとした叢書である。フランス革命期を描くに当って、ナポレオン支配によるドイツの搾取に憤るニッパーダイが、「初めにナポレオンありき」と書き始めたのに対し、英仏のような市民革命の欠如への慨嘆から出発するヴェーラーは、「初めに革命の欠如ありき」と記して応戦したのだった³⁴⁾。これに対し「ドイツ特有の道」論の後輩ヴィ

ンクラーとの抗争は、これとはまた別な様相を呈している。80年代までヴェーラーの「ポスト・ナショナル」路線に同調し、「歴史家論争」でもハーバースマスに加勢していたヴィンクラーは³⁵⁾、ドイツ再統一に際し、徐々に新しいドイツ国民国家に順応する姿勢を見せた。そもそもヴィンクラーの「ナショナリズムの機能」論は、ナショナリズムが（西欧的価値として賞讃されている）自由やデモクラシーといった価値観を推進する役割を果たし得るということを含意しており、「普通の国」論者が要求するような「健全なナショナリズム」の存在を、「左のナショナリズム」の名のもとに事実上認めるものであって、これを認めないヴェーラーとは一線を画していたのである。ニッパードアイやヴェーラーの『ドイツ社会史』の向こうを張って、2000年という節目の年を狙って刊行されたヴィンクラー『長かった西欧への道』は、彼の個性を遺憾なく表現した概説書である³⁶⁾。ヴィンクラーはニッパードアイの叙述に垣間見える西欧への対抗意識、西欧主義への懐疑には同調しない、ヴェーラーと同じ「ドイツ特有の道」論者である。けれどもヴィンクラーは、再統一後にニッパードアイと同じく国民国家がヨーロッパの「普通」であることを認めるようになり、それが失われていた戦後40年余りは「ポスト・ナショナルな特有の道」の時代だったとして、寧ろ問題視するようになったのである。ヴィンクラーにとって、（西欧を中心とする）ヨーロッパに深く根差した再統一後のドイツ連邦共和国は、いわばドイツにおける「歴史の終焉」（フランシス・フクヤマ）を意味するものであった。現体制を露骨に肯定し、ベルリン大学教授としてシュレーダー赤緑政権で軍師役を務め、勲章や学術賞に事欠かないヴィンクラーに嫉妬したのだろうか、ヴェーラーは『ドイツ社会史』第4巻で、ヴィンクラー『長かったドイツへの道』への不信感を露わにしている。ヴェーラーによると、ヴィンクラーは「社会構造史」から古典的な「政治史」へと後退し、ドイツ連邦共和国を肯定し過ぎているというのだった³⁷⁾。

ドイツ国民国家への不信感を捨てないヴェーラーは、1996年のゴールドハーゲン論争に際しても、ゴールドハーゲンに比較的同情的な立場で議論している。この論争においては、ドイツ人の反ユダヤ主義的体質を批判して、アメリカ合衆国で高い評価を受けたハーヴァード大学教授D・ゴールドハーゲンの博士論文『ヒトラーの自発的殺人者たち』が問題となった。第二次世界戦争後の政治的言論において、近代ドイツ社会の反ユダヤ主義的傾向を強調し、もってドイツを糾弾ないし嘲笑するという議論は、少し

も珍しいものではない。けれどもこのときドイツの歴史家たちを苛立たせたのが、歴史家としての専門教育を受けたことがない政治学者ゴールドハーゲンが、素人的な歴史認識を連ねつつ、一見「科学的」に見える概念を用いて、ドイツ人一般の中世以来の反ユダヤ主義的体質を強調し、恰もそれがドイツ固有の現象であったかのように強調したこと、また一警察大隊の事例を検討したに過ぎないゴールドハーゲンが、そこから「普通のドイツ人」の反ユダヤ主義的体質という一般的命題を引き出したことであった。ゴールドハーゲンの家系がアメリカに亡命したドイツ系ユダヤ人であったことも、双方の感情を刺激したと思われる。ドイツでも公開討論が行われたこの論争で注目されるのは、それまで「過去の克服」の熱心な唱道者として「歴史家ツンフト」攻撃に余念がなかった「ドイツ特有の道」論の世代、とりわけハンス・モムゼン(1830年-)らが、ドイツ人を弾劾する若いゴールドハーゲンの学問的未熟さを強調して、恰もかつての「歴史家ツンフト」のような役柄を演じたこと、討論会場に集まった非専門家の(しばしば彼の著書を読んでいない)聴衆から喝采を浴び、しかもゴールドハーゲンがこうした大衆の喝采を、ドイツの専門家に対抗する権力資源としてあけすけに利用したことが、大きなスキャンダルとなったのである³⁸⁾。ヴェーラーはこの論争において中心的な役割を果たしたわけではなかったが、立場表明は行っていた。ヴェーラーはドイツ人の同僚たちと同じく、ゴールドハーゲン論文の学問的未熟さには苦言を呈したが、モムゼンらの感情的な反撥にも距離を置き、ゴールドハーゲンの分析に何ら新味がないかのように言うのは誤りだとしたのだ³⁹⁾。

しかし2年後の1998年、ヴェーラーは新たに勃発した「シーダー・コンツェ論争」で、いきなり批判の的にされてしまう。この論争は、ジャーナリストのゲッツ・アリー(1947年-)らによる告発を契機に、俄に歴史学界で、シーダーやコンツェ、あるいはその事実上の師であるロートフェルスが、1945年以前の言動に関して批判されるようになったことに始まった。こうした西独時代の長老歴史家に対する批判は、従来も東独歴史学で繰り返されてきたことだが、このとき批判の矢面に立たされたのは、「過去の克服」の唱道者として世間の賞讃を浴び、他者に厳しい批判を浴びせかけてきたのに、自分が恩義を感じる師匠たちの「過去」には批判的に向き合わず、これを擁護しようと躍起になったヴェーラーらである。1998年のフランクフルト歴史家大会で話題となったこのシーダー・コンツェ論

争は、2000年のアーヘン歴史家大会でも議論が継続され、ヴェーラーの糾弾大会と化した。西ドイツにおける「東方学」の残滓を告発したヴィリ・オーバークローメ、「東方学」の巨匠オバンを批判したハンス＝エーリヒ・フォルクマン、ロートフェルスを批判したインゴ・ハールら若手の実証研究者と共にパネルディスカッション「過去の呪縛における歴史家たち——ヴェルサイユ条約と冷戦との間の民衆＝民族史と文化的土地研究」に出席したヴェーラーは、明らかにやる気のない僅か5行のレジюмеを提出した⁴⁰⁾。2000年9月29日15時から行われたヴェーラーの報告も、歴史は「構造」で見べきものとして、「個人」の言動を棚上げして「世代」論に集中するというもので、年来の「過去の克服」の唱道者としては余りに歯切れの悪いものであり、聴衆からも不満の声が上がった⁴¹⁾。とはいえこの論争で批判に晒されたヴェーラーは、次第にシーダーに対して懐いてきた自分の違和感についても公の場で強調し、自己弁護を図るようになっていく。1998年の歴史家大会を踏まえて編集された『等閑にされた質問』では、ヴェーラーはシーダーへの敬愛の念を滲ませつつも、自分が彼とは異なる政治的立場を採っていたことを強調したのだった⁴²⁾。

ヴェーラーに限らず、1970年代、80年代の西ドイツで「道徳の使徒」(Moralapostel)とされた左派知識人たちが、21世紀に入って以来、自己批判の欠如を曝露されるという事件が相次いでいる。例えばヴィンクラーは、恩師ロートフェルスが旧東独系の若手歴史家ハールから批判されたのに激昂し、ミュンヘンの『現代史四季報』でハールと激しい論戦を展開した。ロートフェルスと自分とが特定の論点において(とりわけオーデル・ナイセ国境の承認問題に関して)異なる見解を懐いていたことを強調しつつ、ヴィンクラーは父子二代に互って師事した恩師ロートフェルスを、渾身の力を込めて「ナチズム」とは別個な「保守派」として説明し、冷厳な歴史法廷の被告から除外しようとしたのである⁴³⁾。2006年には、『ブリキの太鼓』を初め、近代ドイツ市民道徳を揶揄する諸作品で西ドイツ左派言論界の喝采を浴び、ドイツ再統一にも抗議して日本のドイツ研究者の敬意を集めていた作家ギュンター・グラス(1927年-)が、実は戦時中「親衛隊員」であったことを、いまになって自叙伝で告白した。他人のナショナリズムをかくも厳しく批判してきたグラスが、自分の最も暗い「過去」を、かくも長期間隠匿してきたことは、グラスに対する不信感を喚起せずには置かなかった。とりわけポーランド自主管理労組「連帯」の指導者であったレフ・ヴァ

ウェンサ(1943年-)は憤慨の余り、グラスにグダンスク(ダンツイヒ)名誉市民の称号を返却するよう要求したのだった⁴⁴⁾。2006年10月には、グラスの問題がハーバーマスにも飛び火する。ドイツ随一の日刊紙『フランクフルター・アルゲマイネ』の編集人ヨアヒム・フェスト(1926-2006年)が、死の直前に刊行した自叙伝『私は違う』の中で、間接的な表現ながら、少年時代のハーバーマスは熱狂的なヒトラー・ユーゲント指導者でありながら、そのことを自己批判せず、証拠を「飲み込んでしまった」と暴露したのである。このフェストの「密告」に驚愕したハーバーマスは、自分やグラスのような(左派)知識人を葬るための政治的陰謀だと激しく抗議したが、ヒトラー・ユーゲント時代の自分に対する自己批判を述べた形跡はどこにもない⁴⁵⁾。このように、自分やその関係者に対する批判は断固として拒否したまま、自分にとって都合の悪い他人の道徳的負目のみを声高に論うという振舞いを繰り返すと、そもそもナショナリズム批判、「過去の克服」とは自分の政敵を打倒し、一般大衆から「道徳の使徒」として名声を得るための道具、いわば「道徳の棍棒」(Moralkeule)(マルティン・ヴァルザー)⁴⁶⁾に過ぎないのではないかという道徳的虚無主義を、とりわけ後続世代に喚起しかねないことになる。ヴェーラー、ヴィンクラー、ハーバーマス、グラスらの行動様式は、そういう疑念を招くものだったと思われる。

21世紀に入ると、ヴェーラーはヴィンクラーと同じく、トルコのEU加盟問題を巡って新たな局面に立たされることになった。戦乱に明け暮れたヨーロッパに平和と繁栄とを齎し、超大国アメリカの覇権主義からは距離を置き、国家の権力や支配を超越した「ガヴァナンス」を実現しつつあると、しばしば高い評価を受けているヨーロッパ連合(EU)であるが、その規模が拡大していくに連れ、内部の不一致が目立ってきた。伝統的な脅威ロシアに掣肘を加え、その傘下から多くの「より西欧的な」国々を「救出」という情熱を公然と示しつつ、協力に遂行されてきた冷戦終焉後のEU東方拡大は、余りにも多様な国々を一気に包含したために、ヨーロッパ大での統一した行動(例えばヨーロッパ憲法条約起草やイラク戦争への態度表明など)を困難にし、加盟諸国の階層化を惹起した。こうした中で、積年の先送り課題であったトルコ加盟問題がトルコからの強い要求を受けて待たなしの状況となり、2004年12月に加盟交渉開始が決定されたことは、ドイツ国内での論争に火をつけた。ヴェーラーやヴィンクラーらは、

ヨーロッパとは古典古代文明やキリスト教思想から出発し、ルネサンスを経て自由、人権、理性、デモクラシーといった知性主義的政治文化を育んできた歴史の実体であり、トルコが従来その枠外にあったことは明らかであるとしたのである⁴⁷⁾。2007年になって、ホロコーストの生き残りとしてドイツの戦争責任を追及してきたユダヤ人評論家ラルフ・ジョルダーノ(1923年-)が、かの大聖堂を凌駕するというケルンの巨大モスク建設計画に懸念を表明して暗殺予告を受けたとき、ヴェーラーは断固ジョルダーノを支援する意思表示をした⁴⁸⁾。このように1970年代、80年代の「過去の克服」推進派が、トルコを非ヨーロッパ的勢力として敬遠するというのが、昨今の特筆すべき現象なのである。

このようなヴェーラーらのトルコ排除論に対して、彼が普遍的な「価値共同体」としてのヨーロッパの理想を裏切ったと批判するならば、それは的外れだと言わなければなるまい。蓋しヴェーラーらの「ドイツ特有の道」論とは、ドイツを客体とした「オリエンタリズム」であった。第二次世界戦争の帰結から、西欧は「近代的」＝「正常」、ドイツは「前近代的」＝「異常」という思考枠組を導き出し、多少の論理的譲歩はあるとしても、結論的にはいつもその基本枠組に収まるよう事実を整理するという歴史叙述の方法は、まさにエドワード・サイード(1936-2003年)の言う「オリエンタリズム」のドイツ版である。「オリエンタリスト」ヴェーラーは、従来もドイツだけでなく、例えばロシア帝国ないしソヴィエト連邦などに対して辛辣な描写を繰り返してきたのであり、その矛先がいまここでトルコに向いたとしても、それに仰天するのは浅薄である。また、そもそもヴェーラーやその盟友ハーバーマスの「市民社会」(Zivilgesellschaft)構想は、並々ならぬ知的エリート主義の産物であり、それは「マイリティー」への無条件、無批判の慈愛、同情、共感(いわゆる「判官鼻眞」と、当然のように折り合うものではないのである。

トルコ問題が紛糾したのちも、ヴェーラーはドイツ社会における「道徳の使徒」としての役柄を続けようとしているが、それは必ずしも成功していない。例えば2005年7月、ヴェーラーは社会民主党を脱党したラフォンテーヌが、外国人労働者のことを「Fremdarbeiter」という第三帝国期の一般用語で呼んだことを契機に、このラフォンテーヌを批判している。ヴェーラーはここでラフォンテーヌの「大衆煽動」に苦言を呈し、彼の反米、反イスラエル路線を潜在的な反ユダヤ主義とまで呼んでいる⁴⁹⁾。しかし

他ならぬそのヴェーラー自身が、実は2006年に刊行された回顧インタビュー『活潑なる戦闘状態』の中では、(迂闊にも?)「ウクライナやロシアの *Fremdarbeiter*」と口を滑らせている⁵⁰⁾。戦時中のことを回顧する文脈であるから、臨場感を出すために、わざと当時の言い方を用いたのかもしれない。けれども「過去の克服」の急先鋒であるなら、地の文ではもう少し別の表現をしてもよさそうなものである。もっとも批判的なロシア観を繰り返してきたヴェーラーであるから、彼がウクライナ人やロシア人などに対してもそうした表現を用いるのは、意外というわけではなかろうが。

以上、ヴェーラーの76年の人生を回顧してきたが、そこで気が付くのは、その展開が余りに矛盾に満ちているということである。ヴェーラーは「歴史家ツンフト」批判者として擡頭したが、自分自身には「歴史家ツンフト」に救われた面があり、また彼の世代自身が新しい「歴史家ツンフト」を形成して、新しい世代に「社会史」を権威主義的に押し付けている。ヴェーラーは「過去の克服」の急先鋒として名声を得たが、彼は自分自身や彼の親愛なる恩師シーダーの「過去」には充分批判的に向き合おうとしない。ヴェーラーはドイツ帝国の少数民族抑圧の批判者として学問的人生を歩み始め、歴史家論争などではホロコーストの比較不可能性を説いたが、いまではトルコのEU加盟を阻止するべく尽力している。ヴェーラーはヴェーバーの公然たる礼讃者であるが、価値判断から自由な態度を要求したヴェーバーの呼びかけには答えず、自分の価値観の世界に埋没し、それを相対化する余裕を持とうとしない。ヴェーラーはすでに76歳であるため、彼が残りの人生で大きく変わることはないだろう。次巻では、こうしたヴェーラーの人生が彼のナショナリズム研究にどのように反映しているかを見ていくことになるだろう。

注

- 1) 大石俊一『英語帝国主義論——英語支配をどうするのか』(近代文芸社、平成9年)。
- 2) Hans-Ulrich Wehler (Hrsg.), *Deutsche Historiker*, 9 Bde., Göttingen 1971–1982.
- 3) 第一作は以下のものである。今野元「ハインリヒ・アウグスト・ヴィングラーと「ナショナリズムの機能」論——研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」」、『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』39号(2007年)、73–97頁。

- 4) 以下も参照のこと。今野元「書評：Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte. 4. Band: Vom Beginn des Ersten Weltkriegs bis zur Gründung der beiden deutschen Staaten, 2., durchgesehene Auflage, München: C. H. Beck 2003.」、『國家學會雜誌』(有斐閣)、118巻11・12号(2005年)、108-111頁。
- 5) Hans-Ulrich Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation. Ein Gespräch mit Manfred Hettling und Cornelius Torp, München 2006, S. 13-23; Rüdiger Hohls/Konrad Jarausch (Hrsg.), Versäumte Fragen. Deutsche Historiker im Schatten des Nationalsozialismus, Stuttgart/München 2000, S. 240f.; Wer ist wer? 2004/05, Lübeck 2004, S. 1497.
- 6) Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 39-45; Versäumte Fragen, S. 241-244.
- 7) Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 35.
- 8) Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte 4, 2., durchgesehene Aufl., München 2003, S. 956f.; Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 23f.
- 9) Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 69; Versäumte Fragen, S. 244.
- 10) Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 18, 69f.; Versäumte Fragen, S. 244.
- 11) René König/Johannes Winckelmann (Hrsg.), Max Weber zum Gedächtnis. Materialien und Dokumente zur Bewertung von Werk und Persönlichkeit, Köln/Opladen 1963.
- 12) 安藤英治『ウェーバー歴史社会学の出立』(第二刷)(未来社、1997年)、37-38頁。
- 13) Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 29; Versäumte Fragen, S. 244.
- 14) 内田義彦「日本思想史におけるウェーバー的問題」、大塚久雄編『マックス・ウェーバー研究』(東京大学出版会、昭和40年)、77-89頁。
- 15) Wolfgang J. Mommsen, Max Weber und die deutsche Geschichte 1890-1920, Tübingen 1959.
- 16) Versäumte Fragen, S. 246.
- 17) Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 29f., 49-51; Versäumte Fragen, S. 243.
- 18) Hans Mommsen, Das Ringen um die supranationale Integration der zisleithanischen Arbeiterbewegung (1867-1907), Wien 1963.
- 19) Hans-Ulrich Wehler, Sozialdemokratie und Nationalstaat. Die deutsche Sozialdemokratie und die Nationalitätenfragen in Deutschland von Karl Marx bis zum Ausbruch des ersten Weltkriegs, Würzburg, 1962.
- 20) Hans-Ulrich Wehler, Der Aufstieg des amerikanischen Imperialismus. Studien zur Entwicklung des Imperium Americanum, 1865-1900, Göttingen 1974.
- 21) Hans-Ulrich Wehler, Bismarck und der Imperialismus, Köln 1969.
- 22) Versäumte Fragen, S. 246-248.
- 23) Hans-Ulrich Wehler, Das deutsche Kaiserreich 1871-1918, 7. Aufl., Göttingen

- 1994, S. 11f.; ユルゲン・コッカ (仲内英三・土井美德訳) 『社会史とは何か——その方法と軌跡』 (日本経済評論社、2000年)、70-90頁。
- 24) Max Weber, Politik als Beruf, in: MWG I/17, S. 231f.
- 25) Versäumte Fragen, S. 252.
- 26) Hans-Ulrich Wehler, Krisenherde des Kaiserreichs 1871-1918. Studien zur deutschen Sozial- und Verfassungsgeschichte, Göttingen 1970.
- 27) Hans-Ulrich Wehler, Das deutsche Kaiserreich 1871-1918, Göttingen 1973.
- 28) Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, 4 Bde., München 1987-.
- 29) Hans-Ulrich Wehler, Entsorgung der deutschen Vergangenheit? Ein polemischer Essay zum „Historikerstreit“, München 1988.
- 30) Karl Dietrich Bracher, Leserbrief an die „Frankfurter Allgemeine Zeitung“, 6. September 1986, in: „Historikerstreit“, 9. Aufl., München/Zürich 1995, S. 113f.; Imanuel Geiss, Zum Historikerstreit, in: Ebenda, S. 373-340.
- 31) Hans-Ulrich Wehler, Welche Probleme kann ein deutscher Nationalismus heute lösen?, in: Ders., Gegenwart als Geschichte. Essays, München 1995, S. 127-137; Ders., Westbindung—oder Nationalismus und Großmachtsucht der Neuen Rechten?, in: Ebenda, S. 138-143.
- 32) Thomas Nipperdey, Wehlers „Kaiserreich“. Eine kritische Auseinandersetzung, in: Geschichte und Gesellschaft 4 (1975), S. 539-560.
- 33) Thomas Nipperdey, Deutsche Geschichte, 3 Bde., München 1983/1990/1992.
- 34) Nipperdey, Deutsche Geschichte 1, S. 11; Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte 1, S. 35.
- 35) Heinrich August Winkler, Auf ewig in Hitlers Schatten?, in: „Historikerstreit“, S. 256-263.
- 36) Heinrich August Winkler, Der lange Weg nach Westen, 2 Bde., München 2000.
- 37) Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte 4, S. XXI.
- 38) Daniel Jonah Goldhagen, Hitler's willing executioners : ordinary Germans and the Holocaust, London : Little, Brown, 1996; Briefe an Goldhagen, eingeleitet und beantwortet von Daniel Jonah Goldhagen, Berlin 1997.
- 39) Hans-Ulrich Wehler, Der Stachel im Fleisch. Wissenschaftliche Probleme und politische Dimensionen der Goldhagen-Kontroverse, in: Politik in der Geschichte. Essays, München 1998, S. 11-28. なおゴールドハーゲン論争の展開については以下の評論に詳しい。大石紀一郎「ゴールドハーゲン論争と現代ドイツの政治文化——挑発, 演出, そして〈歴史〉と〈記憶〉の闘いについて (〈現在〉における〈過去〉)」、『ドイツ研究』24号 (1997年)、77-108頁。
- 40) Hans-Ulrich Wehler, Politische Generationen im Augenblick des rechten und linken Totalitarismus, in: 43. Deutscher Historikertag Aachen 2000. Eine Welt—Eine

Geschichte. Skriptenheft 2, Aachen 2000, S. 282.

- 41) この討論には、筆者も聴衆として参加した。
- 42) Versäumte Fragen, S. 250f.
- 43) 今野「ヴィンクラーと「ナショナリズムの機能」論」、77頁。
- 44) SS-Vergangenheit: Walesa macht Grass Ehrenbürgerwürde streitig, in: Spiegel-Online (<http://www.spiegel.de/kultur/literatur/0,1518,431491,00.html>) (2007年10月30日確認)。
- 45) Habermas beschuldigt Fest der Denunziation. Streit um HJ-Vergangenheit des Philosophen, in: CICERO. Magazin für politische Kultur, 25. Oktober 2006 (http://www.cicero.de/php/presse_page_print.php?item=329) (2007年10月30日確認)。
- 46) Martin Walser, Erfahrungen beim Verfassen einer Sonntagsrede, in: Frank Schirrmacher (Hrsg.), Die Walser-Bubis-Debatte, Frankfurt(M) 1999, S. 13.
- 47) Hans-Ulrich Wehler, Ein Türkei-Beitritt zerstört die Europäische Union, in: Ders., Notizen zur deutschen Geschichte, München 2007, S. 160–175.
- 48) Hans-Ulrich Wehler, Türkenprobleme ohne Ende, in: Deutschlandradio (<http://www.dradio.de/dkultur/sendungen/signale/661998/>) (2007年10月30日確認)。
以下の研究は論争をより包括的に整理している。中谷毅「トルコのEU加盟問題とドイツ——宗教・文化、戦略、コスモポリタニズムの文脈で——」、『愛知学院大学宗教法制研究所紀要』48号(2007年)、63–88頁。
- 49) Presseinformation: Wehler wirft Lafontaine Fremdenfeindlichkeit vor, in: <http://www.mdr.de/fakt/2033129-hintergrund-2033836.html> (2007年10月29日確認)。
- 50) Wehler, Eine lebhaftige Kampfsituation, S. 21.

Hans-Ulrich Wehler und seine „kritische“ Analyse zum Nationalismus (1)

Forschungsprojekt „Nationalismusforschung in Deutschland“

Hajime KONNO

Das Forschungsprojekt „Nationalismusforschung in Deutschland“ beabsichtigt, die Spuren der modernen deutschen Nationalismusforscher zu verfolgen und dadurch einen wissenschaftsgeschichtlichen und gleichzeitig politikgeschichtlichen Beitrag zu leisten. Der vorliegende Aufsatz, der zweite in diesem Forschungsprojekt, beschäftigt sich mit der „kritischen“ Nationalismusanalyse von Hans-Ulrich Wehler (1931–), dem bekannten Führer der „deutschen Sozialgeschichte“ und dem unermüdlichen Verfechter der bundesdeutschen Westorientierung. In Teil 1 handelt es sich um seine biographischen Daten, während Teil 2 sich auf die theoretische Analyse seiner Nationalismusforschung konzentrieren wird.

Hans-Ulrich Wehler hat ein widerspruchsvolles Leben hinter sich. Wehler stieg als hartnäckiger Kritiker der bildungsbürgerlichen „Historikerzunft“ in der deutschen Öffentlichkeit auf, obwohl er sich bei seinem quallvollen Habilitationsverfahren erst dank der leidenschaftlichen Unterstützung seines alten Lehrers Theodor Schieder (1908–1984) durchzusetzen vermochte und er sich als überzeugter und ganz kompromißloser Führer der deutschen „neuen Orthodoxie“ gewissermaßen autoritär verhielt. Neben seinem Gummersbacher Freund Jürgen Habermas (1929–) hat Wehler als Moralapostel in der bundesdeutschen „Vergangenheitsbewältigung“ ein gutes Renommee, obgleich er nicht immer bereit zu sein scheint, sich mit seiner eigenen „Vergangenheit“ und der seines Lehrers Schieder im „Dritten Reich“ aufrichtig auseinanderzusetzen. Mit seiner rücksichtslosen Kritik an der repressiven Minderheitspolitik im kaiserlichen Deutschland begann Wehler seine wissenschaftliche Karriere, wenngleich er neuerdings mit Heinrich August Winkler (1938–) die Kampagne gegen den EU-Beitritt der Türkei führt. Teil 2 dieses Aufsatzes wird zeigen, wie sich sein wissenschaftliches und politisches Leben in seiner Nationalismusforschung widerspiegelt.